ベトナム観光公社

筒井康隆

中公文庫

中公文庫

ベトナム観光公社（かんこうこうしや） 改版

定価はカバーに表示してあります。

1979年3月10日初版発行
1997年12月3日改版印刷
1997年12月18日改版発行

著者 筒井康隆（つついやすたか）

発行者 笠松 巌

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Yasutaka Tsutsui

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-203010-2 C1193 Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

ベトナム観光公社

筒井康隆

目次

火星のツァラトゥストラ　7
トラブル　35
最高級有機質肥料　79
マグロマル　97
時越半四郎　127
カメロイド文部省　151
血と肉の愛情　189
お玉熱演　205
ベトナム観光公社　221
解説　中野久夫　261

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ベトナム観光公社

火星のツァラトゥストラ

Zarathustra auf dem Mars
——ein Buch für Alle und Keinen

一、斯くしてツァラトゥストラの没落は始まりき

——Also begann Zarathustras Untergang

『ニーチェ・ブーム』は、火星植民地では『ツァラトゥストラ・ブーム』だった。つまり、一般大衆に知れわたったのは『ツァラトゥストラ』だけで、作者の名ではなかった。というのは、その頃すでにニーチェという地球第二文明期の哲人の名はもちろんのこと、彼の数多くのその他の名著は、縹渺（ひょうびょう）たる歴史の流れの底深くに沈澱して流行の多層の泥に埋もれ、もはや誰もその名を知らず、どの文学史、哲学史の記載にも洩れ、寄せてはかえし寄せてはかえす時代の波の彼方（かなた）に、とっくの昔に消えていたからだ。

だが今、二二五〇年——火星。

『ツァラトゥストラ』だけが復活した。

その年の春、火星常識大学の古典文献学教授カン・トミヅカ氏は、地球大学からコンテ

ナー宇宙船で送られてきた古文書の山をひっくりかえしているうちに、その中から『ツァラトゥストラ』の断片を発見した。

それはすでに、ニーチェの、あのルーテル訳聖書の古代ドイツ語を基調とした高雅にして蒼古な様式の原文ではなく、二十一世紀初期地球語の簡明単純な口語体の文章に訳されていた。

意の赴(おもむ)くままに、一夜その古代哲人の思索の跡とともに寝た教授は、この書物が、もし仮に現代火星語に訳されて出版された場合、必ず評判になり、ベストセラーの相当上位にまで喰いこむであろうと予想した。

「この自伝は、きっと人気が出るだ」教授はそうつぶやいた。彼はこの書物を、ツァラトゥストラという人物が、自分で書いた伝記だと結論したのだ。なぜかというと、著者の名の出ているはずの表紙は剝がされていて、その部分は二十一世紀最大の地球の人気テレビ女優ルルー・サロメのピンナップ用立体フォトで補装されていたからだ。

「おら、これを翻訳して、今学期の教科書にしてやるだ。マイクロ・リーダーを沢山製造して学生全部に買わせるだよ。そしたら、おら儲かるだ」教授はほくそ笑んだ。「この頃の学生は、たいていエゴイストばかりで、どいつもこいつも皆うぬぼれ屋ばかりだから、この本はきっと、学生の間で評判になるに違えねえ。若えもんちうのは、自分の悪いとこ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ろを自己弁護する材料を与えてくれるような本には、かならずとびつくだよ。やさしい言葉に書き直して学生に読ませてやればええ。これを書いた男は唯我独尊権力意志の持ち主だと自分でもいってるだから、たちまち若えもんのヒーローになるに決ってるだ」

その頃、すでに火星には宗教もなく、英雄もいなかった。いるのはただ、マスコミに乗った群小の常識的有名人だけだった。あらゆる意味で、火星生まれの若者たちは力強い指導者に餓えていた。また、五〇〇〇対一の難関を突破して入学したため必然的にエリート意識を持つようになったこの植民地の大学生たちが、この本の「衆愚を踏みにじる」超人道徳を喜んで受け入れるだろうことも、教授には想像することができた。そして、さらにその評判は大学生以外の若者、通俗教養人、はては一般常識人の間にまで拡がって行き、やがてはツァラトゥストラの大流行となって、皆がさきを争って買うことになるだろう——教授はそう思った。

彼は翻訳にとりかかった。もちろん原文の荘重な古語による力感と深い意味を、この二十一世紀初期地球語の軽い調子の文体から汲み尽すことは、教授には不可能だったから、彼はさらにそれを現代的にわかり易くし、訂正補筆し、時には俗語を入れ、適当にジョークを混えて訳した。

また、ツァラトゥストラをより身近に感じさせるため、文体を一人称にした。さらに、

宗教の彼岸的態度を責めた部分、女性の感情的な非合理性を指摘した部分などはカットした。前者は、宗教のない現在の火星には無意味であると判断し、後者は女性読者の反感を考慮したからだ。

こうして教授は、一種の興奮状態でもって『ツァラトゥストラ』第一部を、二月三日から十三日までのわずか十日間で、一気に翻訳した。

翻訳は、こんな調子だった。

ツァラトゥストラのおはなし　その一

ツァラトゥストラ
カン・トミヅカ訳

プロローグ

1

みなさん、こんにちわ。
わたしはツァラトゥストラです。

これからわたしの、面白いお話を聞いてください。
わたしは、三十歳になったとき、わたしの居住区域にある飲料用水の水源地の仕事をクビになり、生まれた家も追い出され、しかたなく山へ行って、そこで生活をはじめました。勝手気ままに、ひとりでオナニズっていたんです。十年間ずっと。
倦きただろうって？
いいえ、そんなことはありませんでした。
でも、やっぱり十年めともなると、気がかわりましたね。
ある朝、めずらしく早起きして外へ出ますと、ちょうど太陽が昇りかけていました。地球では、太陽はまっ赤な色で東から出ます。
で、わたしは太陽にこういいました。
「おてんとさん、おてんとさん。あんたはそうやって毎朝出てくるけど、あんたの光に照らされて喜ぶものがいなければ、あんたは今ほど、しあわせじゃあないでしょう？　ね、そうでしょう？
十年前からずっと、あんたはこの、わたしの住んでいる簡易ドームの上に出てきましたね。でも、そこにもしわたしと、それからわたしのペットの突然変異カナリヤと人工ゼニガメがいなかったら、あんたはやっぱり、ここを照らしたり、出たりひっこ

んだりするのが阿呆らしくなったでしょうよ。いや、そうにきまっています。

だけどわたしたちは、朝になればちゃんとあんたを、待っていてあげたんですよ。あんたの光にあたってあげたんですよ。そして、わたしたちみたいな、いい知りあいを持って、とてもあんたは幸福だろうなあと、思ってあげたんですよ。

だけどねえ、おてんとさん。考えてみると、わたしもあんたと同じようなもんです。わたしはすごく賢くて、そりゃもう、データをつめこみすぎた電子頭脳みたいな天才なのに、だれも、このわたしのことを知らないんです。これは、いけないことですよね。きっと、わたしの知恵をほしがっている人が、たくさんいると思います。だから、あんたと同じように、わたしも、そういう人たちを求めなければ、ならないはずです。

だからわたしは、自分が賢いと思っている人に、自分がどれだけ馬鹿かを思い知らせてやろうと思うんです。馬鹿は馬鹿なりに、すなおに人のいうことを聞いていりゃいいんだということを教えて、喜ばしてやりたいもんです。貧乏人にもそう教え、わたしの知恵をやって喜ばしてやりたいもんです。

だからわたしは、もいちど、あの人口過剰の居住区へおりて行こうと思うのです。

……

教授の思惑は、はずれなかった。

この、読者に直接語りかけるような文体は、軽文化化の進んだ火星の一般市民に喜ばれた。

『誰にもわかる哲学』という宣伝が行きとどいたため、学生はもちろん、若いものの流行に乗り遅れまいとする軽文化人や一般大衆はこのマイクロ・リーダーを、さきを争って買い求めた。彼らにとって、職場や家庭で話しあうことのできる『哲学』があるということは、実に愉快な、嬉しいことだった。

さらに教授は、大学の講義や立体テレビの一般教養講座で、ツァラトゥストラが現代の地球にまだ生きているかのような印象をあたえるように話したため、ツァラトゥストラの名はインテリ女性の間に拡がり、さらに週刊女性3Dフォト・リーダーなどによって、ミーハー族にまで浸透した。彼女らは、未だ見ぬツァラトゥストラの面影を求め、あこがれた。また、いつの時代にもいる芸術家気どり、哲学者気どりの女性の中からは、多くのツァラトゥストリーネが出た。ツァラトゥストラを火星へ招待しようといって、皆から金を集めはじめた女性グループもあった。

『ツァラトゥストラ』は、何カ月もの間ベストセラーのトップを独占した。立体テレビやマイクロ・スキャナーや3Dフォト・リーダーが何度もツァラトゥストラ特集をやり、そ

のたびにカン・トミヅカ教授が引っぱり出された。彼はたちまち有名人の座に名を連ねた。

ひとたびツァラトゥストラを実在の人物であるように喋った以上教授は、その後の多くのインタビューでも、彼が現在地球のどこにいて何をしているのかを詳しく話さなければならなかった。教授の中にあるツァラトゥストラ像は、次第にその姿を明確にしはじめた。自分が創りあげ自分が喋ったでたらめのツァラトゥストラ像を、教授はいつか自分で信じはじめていた。

ある日、火星宇宙空港の乗客係が、ルナ・シティ経由地球火星間定期貨客便の乗客名簿の中に、ゾロアスターという男の写真を発見しておどろいた。

「ツァラトゥストラだ！」

たくましく陽焼けし、眼を光らせ、誇りに満ちた高い鼻を持つその写真の男の顔は、たしかに、彼の知っているツァラトゥストラであった。それはたしかに、彼がマイクロ・スキャナーの合成肖像写真で見た、ツァラトゥストラに違いなかった。彼はあわてて、あちこちのテレビ局にヴィジフォーンをかけ、その男の写真を見せた。

「次の定期便で、地球からツァラトゥストラが来ますよ」

「なに、それはほんとうか。あっ、たしかにこの男だ。大変だたいへんだ」

それからほんのしばらくの間に、火星宇宙空港は押しよせた報道関係者でいっぱいにな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com